

清水多吉著

『ベンヤミンの憂鬱』

一九八四年十一月発行 筑摩書房刊
四六版 一九七頁 一、四〇〇円



本書は既発表の六編に書下しの一編を加え、七編からなるベンヤミン論である。ベンヤミンは、一九二〇年代から三〇年代という、二つの世界大戦の間の時代を駆け抜けた思想家であり、あるいは特異なマルキストとして、あるいは鋭い文芸批評家として注目を集めてきた。著者清水は、バロック悲劇を、カフカを、ボードレールを、パリのパツ

サージューを、遊びと複製技術を、言語と表現を論ずるベンヤミンの根底に「憂鬱者の世界観」を読みとる。「憂鬱」を個人の精神病理としてのみならず、文化史的現象、歴史哲学として考察する試みである。一義的明晰さの対極にあるベンヤミンの叙述を、清水は主としてフランクフルト学派のキータームを外挿しつつ読み解いて行く。

『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』（一九一九）においては、反省、批評を手がかりとして絶対者に乗で登りつめようとするロマン的高揚が見られるのに対し、『ドイツ悲劇の根源』（一九二五）ではロマン的憂鬱が前面に押し出される。背景にはヴァイマル時代の変質があり、ロマン主義の諸潮流はやがてナチズムの勝利にからめとられて行く。ひとつの時代の終焉に立ち、切断された生の流れの中で、「充電された過去」（ハーバーマス）にのみ生きる憂鬱者^{ムランツカ}は、眼前の対象を一義的にとらえることを拒否する。シンボル（象徴）の持つ一義性、統一性、さらにはシステムに秩序づけられる明晰性に対し、曖昧さと多義性を持ちながら、シンボルが切り捨てざるを得ぬ極端なもの^{メタファー}を救い出すのが、メタファー（隠喩）、アレゴリー（寓意）である。憂鬱者の表現形式はメタファー、アレゴリーであらざるを得ない。ベンヤミンのアレゴリーを評価し、

ヴァイマール左翼が把握し得なかった民衆の非合理的な思考、情念を指摘するプロツホ、アレゴリーを無批判に肯定された物神化にすぎないと批判するルカーチ、さらにはアレゴリーのもつ表現のダイナミズムを評価しつつ、なお発話行為による合意の合理性を求めるハーバーマス。清水はアレゴリー理解をこのような三極に整理し、これらに欠けているベンヤミンの内的動機を憂鬱であると見る。英雄の運命悲劇であるギリシア悲劇に対し、バロック悲劇は絶対君主の孤独と憂鬱を描く。ベンヤミンのバロック・アレゴリー研究の根底には憂鬱があった。『一方通行路』（一九二八）もまた、意味ある過去と不如意で無意味な現在の間で、意味を求めて彷徨するという、憂鬱者の一方通行的行為を示すものであると言う。

ベンヤミンの三〇年代の諸論文に結ばれる思惟像は「現代の太古史」^{ウルゲンヒテ}（アドルノ）である。ベンヤミンはこれを一九世紀のパリに見た。三色旗に象徴される市民ではなく、赤旗に象徴される労働者でもなく、パッサージュ（遊歩街）のフラヌール（遊歩する人々）こそ都市の根源的経験を語る。プルヴァール（大通り）にのみ込まれつつある眼前のパッサージュに幻想のパッサージュを重ね合せ、消えて行くフラヌールに充電された経験を見たのである。カフカ論、ボードレーール論もまた、近代化の過程で変質し失わ

れて行く経験や言葉を追い求める、憂鬱者の世界了解であった。

経験の変質の問題は「複製技術時代における芸術作品」（一九三六）にも通じている。芸術作品は観客から遠く、一回性のものであり、アウラにつつまれていた。近代の複製技術は作品と観客との近さを獲得し、反覆性を可能にし、同時に作品のアウラを剝奪した。複製は一回性を喪失したくりかえし（永却回帰）となる。ベンヤミンは永却回帰によって慣習化された経験を拒否し、シミュレーション化された現実にはたわむれることを拒否する。

アドルノ——フランクフルト学派、ブレヒト——マルクス主義、ショーレム——ユダヤ神秘思想、三様の理解と批判は、ベンヤミン自身が引かれていた三つの圏でもある。本書はいずれにも近さを持ち、同時にいずれとも一致することのなかったベンヤミンを、憂鬱者として浮彫りにする。清水は現代を、経験がコンピューターの打ち出すシミュレータークルによって代替され、シミュレータークルが規範へと昇華される「分裂症」の時代であると言う。「脱構築」論が「ネアカ」に語られる今日、変質した経験を、失われたアウラを救出しようとする憂鬱者の世界に対する「構え」こそ、著者が現代に問いかけるものであろう。

（光木明美）